

# 第61回小島三郎記念文化賞並びに 第33回研究助成金贈呈式

第61回小島三郎記念文化賞並びに第33回研究助成金の贈呈式が、去る10月31日(金)午前11時より東京會館本館(東京・千代田区)において開催されました。



渡邊治雄理事長



植松 智氏 大阪公立大学大学院医学研究科 教授/  
東京大学医科学研究所・特任教授  
業績:腸内細菌制御による革新的な疾患治療法の研究開発



審良静男氏



宮地勇人理事

## 小島三郎記念文化賞

小島三郎記念文化賞の受賞者は、大阪公立大学大学院医学研究科 教授の植松 智先生で、受賞のテーマは「腸内細菌制御による革新的な疾患治療法の研究開発」です。植松先生は腸内細菌叢と疾患との因果関係を分子レベルで解明し、革新的な治療戦略を提示しました。例えばバクテリオファージ由来のエンドライシンが腋臭症の原因であるStaphylococcus hominisを殺菌し、臭気産生を抑制することを動物実験で示し、その結果は、病原共生細菌の制御に対して「ファージ療法」が有用である証拠となりました。この業績は世界的にも卓越しており、極めて独創性が高く、今後さまざまな疾患の治療法への応用が期待されます。よって、これらの業績が高く評価され受賞の対象になりました。

贈呈式は、本財団渡邊治雄理事長の挨拶で始まり、続いて同理事長より「今回推薦された小島三郎記念文化賞候補者は、病原微生物学、感染症学、公衆衛生学などに関連した領域において学問的に顕著な業績で、しかも我が国の文化に貢献したと考えられる、又は今後貢献すると期待される業績であり、いずれも極めてレベルの高いものでした。そして厳正な審査の結果、植松智氏に決定しました。」との選考経過報告があり、同氏に賞状、記念トロフィー、副賞が贈呈されました。

また、植松氏を推薦された大阪大学ワクチン開発拠点長の審良(あきら)静男氏より推薦のお言葉をいただき、同氏の業績を紹介していただきました。

## 研究助成金

研究助成金の選考経過については、選考委員長である本財団理事の宮地勇人先生より、「申請応募件数215件から選考委員会で審査・選考され、厳粛な審査の結果、特に優れた18名に決定された。」との報告がなされた後、理事長より研究助成金、総額1,800万円が贈呈されました。

## 受賞者挨拶

小島三郎記念文化賞を受賞された植松智氏より、「私の研究内容を高く評価いただき、受賞させていただいたことは、本当に私自身嬉しく、とても身の引き締まる思いであります。今回単離しましたエンドライシンという酵素を是非とも臨床応用として、製剤化し患者様に届けたいと考え、また、この分野の若い研究者の育成にも努めていきたいと思っております。」と受賞の喜びと今後の抱負を述べられました。



助成金受贈者(敬称略)  
(前列左より)出居真由美、白上洋平、畑山祐樹、西岡光昭、宮地選考委員長、柿田徹也、武井理美、萩原秀、佐賀由美子、片桐孝和  
(後列左より)田中ゆきえ、徳永尚樹、酒井康弘、朝比奈彩、林泰司、前田圭介、渡辺直樹、森田未香、加藤博史



田中ゆきえ氏



寺本哲也常務理事

また、研究助成金受贈者代表の東京科学大学大学院 医歯学総合研究科 微生物・感染免疫解析分野 准教授 田中ゆきえ氏より「臨床の進歩は基礎研究に支えられ、基礎研究は臨床の課題に導かれて進化していきます。この両者をつなぐ橋渡し役として、私たちが携わる臨床検査医学における基礎研究の発展も科学に基づく医療を支える上で極めて重要な使命であると考えております。今回の助成を糧に、今後も研究を通して医学、医療の質の向上に貢献できるよう一層務めてまいります。」と受賞の喜びと今後の抱負を述べられました。

挨拶の後、植松智氏による受賞テーマの「腸内細菌制御による革新的な疾患治療法の研究開発」についての受賞記念講演があり、研究内容を分かりやすく説明していただきました。

最後に本財団寺本哲也常務理事より閉会の挨拶があり「植松氏には心よりお慶びを申し上げます。ご受賞を契機に、さらに先生のご研究が伸展され、一日にも早い臨床応用をされますことをお祈りする。また、研究助成金受贈者の方々にはこの助成金を有効に使い、先生方の研究が更に進展されることを期待している。」と述べられました。



文化賞受賞記念講演の様子

引き続き、受賞の先生方を囲んで祝賀会に移り、本財団の吉村理事のお祝いの言葉と乾杯で始まりました。前年度より研究助成金受贈者の研究課題が祝賀会場に掲示され、参加の方々との交流が図られました。その後祝賀会は盛会のうちに散会となりました。

(事務局 田代 保之)



吉村和久理事



祝賀会交流の様子